



『花ざくら』 渋谷天外・三林京子

「日本人が持っている温かさ、義理と人情、和…。いろんなもんが含まれているお芝居。『大阪にはこんな素晴らしいもんがあるねんで』とお知らせするのが私の義務やと思ひます」。父の意思を引き継ぎ、新生松竹新喜劇俳優部の代表を務める三代目渋谷天外(52)。自分を落とし上げたりしながら冗談交じりに話す言葉の端々に、劇団の灯を守りたいという懸命な思いをのぞかせる。

#### DNAがひきつけた喜劇の世界

父親の二代目渋谷天外は1948年、松竹新喜劇を旗揚げ。紆余曲折を経ながらも、藤山寛美とのコンビで不動の人気を得た。そんな父親と同じ役者になることは頭になかったが、「大学生の時に自分で書いた本を藤山先生の所に持っていった」ことが縁で、卒業後には松竹新喜劇に入団した。

「藤山先生に舞台に出てみると言われ、1ヵ月後には北海道の巡業公演で初舞台を踏んだ。先生の一言がきっかけとなったけれど、やっぱりDNAでしょうね。じゃなかったら近づかなかった」。

前名は渋谷天笑。舞台のほかテレビなどにも活躍の幅を広げていく。一時は劇団を離れたが、90年、二代目が病に倒れた後、一枚看板となって劇団を支えていた寛美が死去。「自分が守らなければ」という強い気概を持ち、翌年には「新生松竹新喜劇」と改称して新たな船出を決意する。

#### 芝居の本質を知る

92年、三代目渋谷天外を襲名する。「大きな大きな卵の殻をもろたと思った。中身が埋まった時に、天外の名前がしっくりくるんやろなと」。それから今日まで「周りのものすべてとの戦い

だった」と振り返る。

「藤山先生は生前、『芝居は芝居やない。人間の持っている本質が出なければ芝居にはならん』と言ってはった。いかに生きてきたか、いかに生きているか、その過程が芝居に反映すると」。

自分がどう考えて生きていくかが芝居の切り口となり、今の自分にしかできない芝居があると気がつくまで、随分と時間がかかった。「今は下手と言われようが何と言われようが自分は自分。観る人を感動させる芝居ができればいいと思えるようになった」。

#### 豊かな心が息づく舞台を継承

現在劇団員は32人で、年間2ヶ月弱の舞台を踏む。最近は原点に戻って過去の作品を掘り起こして再演している。「1400本ほどある作品の中には、今の時代にもアピールできるものがいっぱいある」という。

伝えていきたいのは、「金や名誉なんかよりも人間にはもっと大事なもんがあるんとちゃうんか」と胸を張って言えた時代の日本人の豊かな心だ。「昭和30年代は、思いやりのあふれる温かい時代だった。その世界が、うちの芝居には息づいている」。

長年の夢は海外進出。「『お祭り提灯』と『銀のかんざし』を持っていけば、向こうでも絶対に理解される」と明言する。劇団がさらに飛躍するためにも、「よっしゃ、私が新喜劇の華になってやろうと思う人にどんどん来てほしい」と願う。

「四代目? 天外の名前を残すよりも、大阪の喜劇、大阪の芝居として確立されたものを残したい」。大きな眼がひととき強く光った。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

CLOSE  
クローズアップ  
UP

# 未来へ潤す泣いて、 笑って人情喜劇を、

#### プロフィール

新生松竹新喜劇俳優部代表

し ぶ や て ん が い  
渋谷 天外 さん



#### 【プロフィール】

1954年12月1日、大阪府生まれ。本名・渋谷喜作。77年に大学卒業後、松竹新喜劇に入団。91年に新生松竹新喜劇俳優部代表に就任し、翌年に三代目渋谷天外を襲名する。今年7月、映画「L.A. Wedding Eve」でホルル国際映画祭最優秀男優賞を受賞した。和歌山県白浜町在住。(大阪松竹座:06-6214-2211)

#### 【新生松竹新喜劇師走公演】

新築開場十周年を迎えた大阪松竹座で12月2～10日、『色気斬お伊勢掃り』『花ざくら』を上演。出演は渋谷天外、高田次郎、井上恵美子、千草英子、曾我廼家八十吉、曾我廼家寛太郎ほか。三林京子が特別出演。